

紀

要

第 12 号

1999. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き

— 地域の検討 3. 湖南地域 —

瀬 口 眞 司

1. はじめに

列島の縄文社会を観察し、そこから我々の現在と未来を照射することが私の前半生のテーマである。そのためにここ数年でしておきたいことは、絶好のフィールドと考えている近江の縄文時代から弥生時代前期に関する資料の俯瞰作業である。

本稿はその俯瞰作業の第3弾である。前稿（瀬口眞司 1997・小島孝修1997）では、近江の湖東地域を検討した。それから1年が経とうとしている今、理念や方法において整理し直すべき点が露わになった。そこで、現状で出来る範囲の再整理を本稿のはじめにしておきたい。

A. 作業の基本理念

なぜ、俯瞰するのか。奉職してから6年間、大津市栗津第3貝塚の調査研究に私は渾身の力を振り絞ったつもりでいる。その結果、一冊の報告書を世に出すことができた。しかし、満足感より虚しさを感じたのが正直なところである。出来・不出来が問題なのではない。20代と言う大事な時期に漠然とした問題意識に埋没し、目前にある一地点の資料だけを盲目的に弄り倒してしまったことが虚しいのである。まさに「木を見て森を見ず」、何がポイントだったのか？何のために努力し、結局何が見えたのか？——俯瞰するのは問題意識や着目点を自問し、現状における認識と、それを深める上で必要な仮説・課題をあぶり出したいからである。木を見るのは森を見てからでいい。むしろその後であるべきだ。むやみにバットを振っても得点に結びつかない。状況を的確に判断し、狙い球を定め、適正なフォームでスイングしなければ、タイムリーは打てないのだ。

さて俯瞰の対象であるが、ここ数年の対象は近江に限っている。しかも一度の作業は近江の中の小地域を対象としている。これで俯瞰とは片腹痛いかも知れない。しかし私は次のように考える。

まず俯瞰にも色々なレベルがある。ランドサットの目もあれば、セスナの目もあるのだ。いわばラン

ドサットの目による見方や、例えば広域編年的・系統論的・伝播論的な考え方は優秀な隣人に任せる。特殊なものを広域的に一般化させてしまったり、逆に個々の地域が有する動態を見失う。そんなリスクを凡庸な今の私は持っているからだ。“『社会的な差異や転換が現れる要因と条件』の考古学的究明”を根本的な動機とする私にとって、そのようなリスクは当面回避せねばならぬ。今の私が乗るべきなのはセスナなのである。

ただ、ランドサットの目の見方を否定しているわけではない。このような見方を優れた形で出来る研究者は多数いる。だから慌てて追従する必要はない。近江の地に奉職する今の私がすべきなのは、ランドサットの目で捉えられた意見、あるいは定説化しつつある意見に対して、セスナの立場で検証・反証していくことだ。ランドサットに乗り換えるのはその後でいい。

B. 本作業の位置づけ

筆者が踏みたいステップは以下の通りである。本稿を含む一連の俯瞰作業は、そのa) およびb) に位置づけている。

- a) 資料の俯瞰。必要に応じて関連諸科学で既存するモデルや理論を援用する。
- b) 解釈とその際に生じる仮説・課題の抽出。上記俯瞰作業に基づく。
- c) 各論的課題の実践。上記仮説の検証と反証を目的とする。
- d) 展開過程に関する結論の提示。併せて既存するモデルや理論の修正を試みる。

C. 俯瞰作業の手順と着目点

- 1) 準備として地理的条件を把握する。
- 2) 「地区」の設定。地形類型と遺跡の分布に着目して設定し、その内容と消長を整理する。
- 3) 「段階」の設定。各地区の消長や活動痕跡の増減に注目して設定し、事象の変化と地区間におけるその相違を観察する。

観察に際しては、活動痕跡の初現時期や定着性の強弱、想定されるルートとの位置関係、あるいは普遍的・一般的なあり方に対する特殊性などに着目する。なお、特殊性の抽出は、どこでも確認されるとは限らないアイテム・事象をもって行う。今回の俯瞰作業では、祭祀装置・稀少品・搬入土器・大規模な土木行為・個人への労働投下の顕在化などを特殊なるものとして取り扱う。この場合、祭祀装置とは、祭祀に関わる道具・遺構と従来からされてきた土偶・石棒・石剣・独鈷石・配石遺構などを指す。また稀少品は、近江では普遍的に出土しない黒曜石・琥珀・深海性の貝などを指し、搬入土器とは全体の数パーセントしか出土しない客体的な他地域の土器を指す。大規模な土木行為とは灌漑用水・水田・墳丘墓の造営を指し、このうち墳丘墓は個人への労働投下という側面を併せ持つものとする。

- 4) 湖南地域における縄文社会の展開過程に関する仮説の提示。併せてそこで表出する課題の提示を行う。

D. そのほかの前提

ア) 今回用いる情報は、1998年度段階のものであり、未発掘部分にブラインドした見かけ上の事象や、復元途上の情報でしかない。しかし、ブラインドや不完全な情報の存在は、考古学の持つ宿命でもある。そこで今回の作業は、1998年度段階での到達点と割り切り、ブラインドの減少や情報の復元が進み次第、書き換えていくと言った方向性を採ることにする。

なお、地形区分は現状で可能な範囲での類推をもとにして行い、【山地・丘陵】、【扇状地】、【氾濫平野・谷底平野】、【湖岸近接地・後背湿地】の4区分を設ける。このうち湖岸近接地とは、以下のいずれかの条件に該当する範囲を指す。①現在の湖底、②氾濫平野に存在する三角州帯のうち推定される当時の湖岸よりおよそ2km以内の範囲。

イ) 資料の存在を示す場合は「活動痕跡」という語を用いる。遺構が無く、数片の土器しか確認されない遺跡がある。このような資料を他地点からの流入品と考えるむきもある。しかし、例えばそれが一時的もしくは季節的な短期の露营地における痕跡だ

った可能性も考えられる。そこで、そのような資料も今回の俯瞰作業では「活動痕跡」に含んで検討する。

ウ) 前稿では、遺跡の分布上のまとまりを「遺跡群」として把握していたが、本稿では全て「地区」と置換する。同一の集団が継起しながら構成していくといったニュアンスを「遺跡群」は潜在的に含みかねない。しかし、実際そうであったとは限らないし、そういったことを本稿で問題にしたいのではない。あくまで空間を指し示す「地区」を分析対象とする。本稿ではそれで十分である。

エ) 各地区の消長を見る際の時期区分は、「土器とその情報」研究会1997を若干改めた表1を用いる。なお、縄文晩期後半の土器と弥生前期前半の土器は型式学的には分別するが、近江においてはしばしば共伴するので、時期的にはほぼ並行するものとして取り扱う。

表1 時期区分

縄文早期	前葉	ネガティブ押形文
	中葉	通常の押型文
	後葉	条痕文
縄文前期	前葉	羽島下層Ⅰ式・轟B式
	中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式
	後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式
縄文中期	前葉	鷹島式～船元Ⅰ式
	中葉	船元Ⅱ・Ⅲ式
	後葉	船元Ⅳ式～北白川C式
縄文後期	前葉	中津式～北白川上層Ⅱ式
	中葉	北白川上層Ⅲ式～元住吉山Ⅰ式
	後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
縄文晩期	前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式
	後半	篠原式～長原式
弥生前期	前半	Ⅰ様式古段階・中段階
	後半	Ⅰ様式新段階

2. 地理的条件

近江は四方を山で囲われている。その山々は幾つかの峠を持ち、また幾つもの河川を生んでいる。諸河川は扇状地と氾濫平野を形成し、近江の中心たる琵琶湖へ流れ込んでいる。

近江の特性の一つは、バラエティーに富む地形の

セットが琵琶湖を中心に配置されていることである。

また、周囲に屹立する山々により「一つの閉ざされた空間＝BOX」としての地理的側面を持つ一方、幾つかの峠は東日本に連なるルートとなっている。東西それぞれの要素が行き交う通過点としての性格も近江は有しているのである。

内部と外部、東と西、地形的なバリエーション。このように、興味深い比較項目を近江の地は用意してくれている。偶然にも奉職することになった近江だが、人類史を語る上で絶好のフィールドの一つだと私は確信している。

さて、今回取り扱う湖南地域とは、近江の南東部にあたる守山市・野洲町・中主町・栗東町・草津市・信楽町・大津市東部地域を指す。この湖南地域の広大な平野は、鏡山およびその後背の水口丘陵、信楽山地およびその裾を取り巻く丘陵地によって南東を限られる。そして、西部には琵琶湖が広がり、北部は日野川を挟んで湖東地域に連なっている。

その地形 鏡山は花崗岩からなり、その風化した土砂による扇状地が山麓で形成されている。山中からは家棟川や光善寺川が流れ出で、野洲川と共に湖南平野の北部を形成している。三重県との境に源を持つ野洲川は、鏡山・水口丘陵と信楽山地の間をすり抜けるように流下し、広大な湖南平野に至る。下流域にはその旧河道が多数遺存する。信楽山地の裾野には、栗東丘陵と瀬田丘陵がめぐる。山中から発する葉山川・草津川・北川などの河川は野洲川とともに扇状地および氾濫平野を形成する。大戸川は、三重県との境に源を持ち、信楽山地を西流して、瀬田川に合流する。琵琶湖の南端からは、琵琶湖唯一の流出河川である瀬田川が南流し、宇治川・淀川と名を替えながら大阪湾に至っている。

そこに結ばれるルート 近江内部のルートとしては、①水上交通路としての琵琶湖、②湖岸線沿いのルート、③内陸部のいわば縦貫ルートが想定できる。移動には、水およびランドマークが必要不可欠である。土壤の差異に起因する植生変換線（一つのランドマーク）であり、湧水点列が連なる扇状地扇端部ラインが③にあたる¹¹と考えて良いだろう。このライン周辺にしばしば活動痕跡を確認できることから、この想定には妥当性があると考えている。

一方、近江外部と交信できるルートにはどのようなものがあるか。まずその第一は、伊勢南部地域に通じる野洲川沿いルートである。湖東地域の犬上川沿いルートや愛知川沿いルートと異なり、勾配が緩やかなため、国道1号線や鉄道（JR草津線）が敷設され、東日本と西日本を結ぶ大動脈となっている。そのほか、大戸川沿いルートは伊賀地域へ、瀬田川沿いルートは京都・大阪方面へ至っている。

3. 事象の整理

A. 各地区の内容とその消長

当地域では、大別5地区・細分12地区に分けられる（図1）。各地区に属する遺跡とその内容は表2にまとめ、消長は表3に整理した。それらをもとに、以下、旧石器時代～弥生時代前期後半における各地区の様相を概観する。

1地区（1・2） 家棟川・光善寺川流域

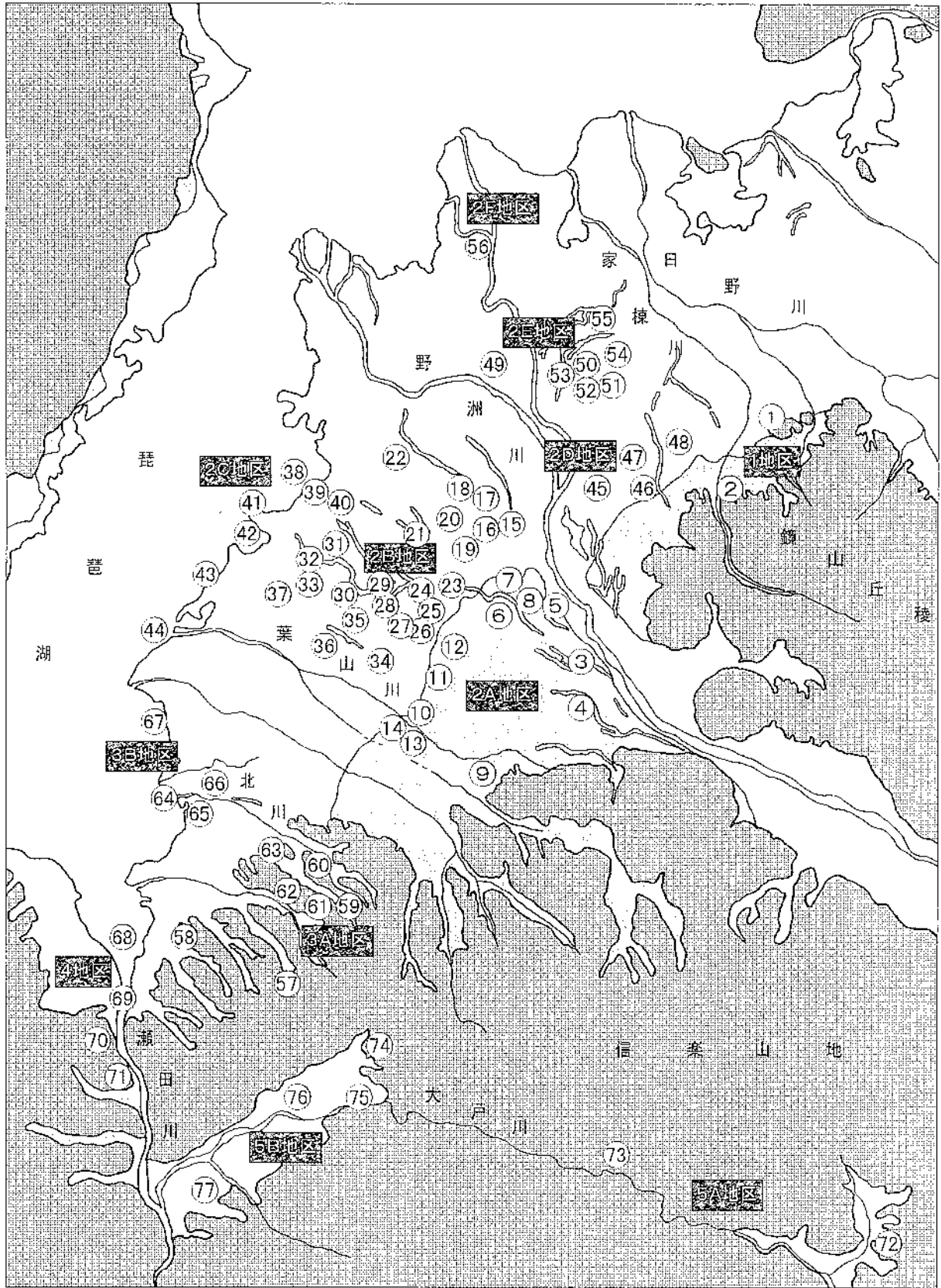
鏡山の裾野もしくはそれに近接する独立丘陵の裾野一帯を指す。旧石器時代もしくは縄文草創期に属すると考えられるナイフ形石器が2遺跡（1・2）で表採されている。

2地区（3～56） 野洲川・葉山川流域

6つの小地区に分ける。このうち2A～2C地区は現野洲川左岸の旧流路域一帯、2D～2F地区は現野洲川右岸の旧流路域一帯を指す。

2A地区（3～14） 旧野洲川・葉山川が形成した栗東丘陵下部扇状地一帯を指す。活動痕跡の初現は、縄文早期末～前期初頭の土器（3）で、現状では欠落する時期の有無が不詳だが、弥生前期後半（12）までの痕跡がみられる。縄文前期や後期の竪穴式建物が数遺跡（3・9・10・13）で検出されている。また縄文後期には配石遺構群（3）がみられ、縄文前期後葉には関東・北陸地方からの搬入土器（10）がみられる。時期不詳だが、石棒（4）も出土する。

2B地区（15～37） 旧野洲川および葉山川が形成した氾濫平野一帯を指す。活動痕跡の初現は、縄文中期中葉の土器（34）である。欠落する時期の有無は不詳だが、弥生前期後半（18・22・30・32・34）までの痕跡がある。縄文中期後葉に始まる遺跡が目立つ。縄文中期や後期の竪穴式建物が数遺跡（19・



- 山地・丘陵地
- 扇状地
- 氾濫平野・谷底平野

図1 湖南地域における遺跡の分布

28) で検出され、縄文中期・後期・晩期の石棒 (19・28・33)、縄文中期の独钻石 (34)、縄文後期の配石遺構 (19) も確認されている。また、縄文中期後葉には東海地方からの搬入土器 (23・27) がみられ、弥生前期前半の土器 (34など) も確認される。弥生前期末から中期の方形周溝墓 (30)、弥生前期末の灌漑用水や中期初頭の方形周溝墓 (34) が検出されている。

2 C 地区 (38~44) 旧野洲川および葉山川河口付近の湖岸近接地一帯を指す。活動痕跡の初現は、縄文早期後葉の集石炉 (38) で、弥生前期後半まで継続的に痕跡がみられる。赤野井湾遺跡 (38) では石剣 (時期不詳) がみられ、縄文後期前葉以降の東日本各地の土器 (称名寺式・三十稻場式・元刈谷式・御経塚式・八日市新保式・亀ヶ岡系土器・浮線網状文・水神平式) が検出されている。そのほかの搬入土器としては諸磯式・新保式 (42) や浮線網状文 (39) が確認され、弥生前期前半の土器も数遺跡 (39~41) で確認されている。

2 D 地区 (45~48) 鏡山下部の扇状地扇端部からその付近の氾濫平野一帯を指す。活動痕跡の初現は、縄文後期前葉の土壙 (45) で、弥生前期後半までの痕跡がみられるが、縄文後期中葉~後葉の痕跡を欠く。(45) で縄文晩期の配石遺構と弥生前期前半の土器が検出されている。

2 E 地区 (49~55) 現野洲川の氾濫平野一帯を指す。活動痕跡の初現は縄文晩期後半の土器 (49) で、弥生前期後半までの痕跡がみられる。服部遺跡 (49) で晩期の石棒、晩期後半の搬入土器 (中部・北陸) が検出され、当遺跡ほか2遺跡 (50・51) で弥生前期前半の土器がみられる。弥生前期後半の水田跡も検出されている (49)。

2 F 地区 (56) 現野洲川下流域の湖岸近接地一帯を指す。縄文晩期の土器と弥生前期の土器、および丸木船が検出されている。

3 地区 (57~67) 北川流域

2つの小地区に分ける。なお、正確には北川流域でない北山田湖底遺跡 (67) も本地区に含む。

3 A 地区 (57~63) 瀬田丘陵およびその谷部付近一帯を指す。旧石器時代の尖頭器などが確認され (57・58)、時期不詳の落とし穴状遺構 (60) やサヌ

カイトのチップなどが検出されている。縄文期の活動痕跡としては (63) で貯蔵穴状遺構 (中期末ないし後期初頭) が2基確認されている。

3 B 地区 (64~68) 北川下流域の湖岸近接地一帯を指す。活動痕跡の初現は縄文早期後葉の土器 (64・65・67) で、弥生前期後半までの痕跡が確認できるが、縄文中期前葉の痕跡を欠く。北萱遺跡 (65) で祭祀装置 (石刀・石棒)、縄文晩期前半の北陸からの搬入土器 (中屋式) がみられる。

4 地区 (78~71) 瀬田川流域

瀬田川流出口域の湖底 (旧湖岸) および付近一帯を指す。国府型ナイフ形石器 (70)、縄文草創期に遡ると考えられる石錐 (69) が確認され、縄文早期前葉のクリ塚 (68) が検出されている。以降縄文晩期後半までの痕跡が確認されるが、縄文後期中葉・晩期前半の痕跡を欠く。石山遺跡 (71) からは深海性貝類 (貝輪・小玉) や明確な埋葬施設を検出した。栗津湖底遺跡 (68) 第3貝塚からは、祭祀装置 (縄文中期前葉・土偶)、稀少品 (縄文中期前葉・深海性貝類を用いた貝輪や琥珀片)、関東・北陸・中部地方からの搬入土器 (縄文前期後葉・中期前葉)、東海地方からの搬入土器 (縄文中期前葉・中葉) が検出されている。

5 地区 (74~78) 大戸川流域

2つの小地区に分ける。

5 A 地区 (74・75) 大戸川上流域の山中・盆地一帯を指す。(74) で縄文早期後葉の土器が確認され、(73) でサヌカイト製の石匙が検出されているほか、明確な痕跡はつまびらかではない。

5 B 地区 (76~78) 大戸川下流域の平野部一帯を指す。(75) で縄文早期後葉の土器を伴う竪穴式建物状の遺構が確認されており、これが当地区における痕跡の初現となる。ただし現状では継続的とは言えず、縄文晩期まで活動痕跡を欠いている。(76) で弥生前期の土器が確認されているが、前半期のものを含むかは不明である。

B. 段階の設定

以上、湖南地域における各地区の内容と消長について整理した。以下では、これらの成果を基に当該地域における事象の変化について整理する。(図2・3)

No.	遺跡名	所在地	現状の立地類型	地区	概 要
1	夕日ヶ丘北	野洲町大藤原	氾濫平野	1	サヌカイト製ナイフ形石器。
2	小堤	野洲町小堤	扇状地	1	サヌカイト製国府型ナイフ形石器。
3	辻	栗東町辻	扇状地	2A	粟津SZ1式が出土。北白川下層Ⅱa式を伴う土壌を検出。ここからイチイガシを含むコナラ屑・シイ類・石鏃・石錘・石皿などが出土。縄文後期の土器埋設遺構・竪穴式建物・配石遺構群。
4	高野	栗東町高野	扇状地	2A	船元Ⅲb式を用いた土器埋設遺構(1.2×0.8m、土器は斜位)、後期の土器が出土する旧河道、長原式土器。蛇紋岩製磨斧、砂岩製装身具、石棒も出土。
5	立入荒牧	守山市立入町	扇状地	2A	縄文後期。
6	吉身北	守山市勝部町	扇状地	2A	北白川上層式を伴う土壌。
7	益須寺岡連	守山市吉身町	扇状地	2A	縄文晩期の遺構。
8	岡	守山市岡町寺	扇状地	2A	縄文晩期突帯文土器。
9	狐塚	栗東町安養寺	扇状地	2A	沼沢地と推定される堆積層から船元式土器が出土、付近より縄文晩期後半の渚とし穴式土壌も検出する。石匠炉類似堆積土から北白川C式、中津式の竪穴式建物2棟を検出。銅片や石臼炉がみられた。
10	下鈎	栗東町下鈎	扇状地	2A	北白川下層Ⅱa式・Ⅱc式・Ⅲ式・大蔵山式・諸磯b式・北陸規ヶ森式を伴う竪穴式建物。いずれも貯蔵穴状土壌を伴う。石鏃・石錐・石匙・石斧・石皿が出土。大蔵山式に伴う滑石製管玉、赤色顔料塗布耳栓。そのほか縄文中期中葉・中津式・後期、晩期後半の土器が出土。
11	野尻	栗東町野尻	扇状地	2A	縄文後期の土器、遊賀里Ⅳ式ないし長原式の破片。縄文晩期の旧河道から大粒の植物遺体と共に針状土器。
12	伊勢	守山市伊勢町	扇状地	2A	縄文後期の土器、突帯文土器。縄文時代の竪穴式建物。弥生前期後半の土器。
13	小柿	栗東町小柿	扇状地	2A	縄文後期初頭の竪穴式建物1棟。炬を持つ。
14	中沢	草津市波川2	扇状地	2A	弥生前期の土器が満より出土。
15	播磨田東	守山市播磨田	氾濫平野	2B	中津式・切目石鏃。
16	酒寺	守山市播磨田	氾濫平野	2B	縄文後期の包含層のほか、同時期の溝状遺構・ビット・サヌカイト片・磨石。
17	八ノ坪	守山市播磨田	氾濫平野	2B	縄文後期の流路状遺構、縄文晩期の渚。
18	今市	守山市播磨田	氾濫平野	2B	縄文晩期突帯文土器、弥生前期新段階の土壌。そのほか縄文晩期の沼状遺構、弥生前期の土壌が検出されている。
19	吉身西	守山市守山町	氾濫平野	2B	縄文後期末の竪穴式建物4棟・土壌10数基・土器・サヌカイトのコア・チップ・石鏃・磨石・玉・石棒・配石遺構。そのほか縄文後期の竪穴式建物1棟・土壌・落ち込み、焼土塊。
20	播磨田西	守山市播磨田	氾濫平野	2B	縄文後期・晩期の土器・溝。
21	石田三宅	守山市石田町	氾濫平野	2B	SD26から元住吉山Ⅰ・Ⅱ式、SD30から遊賀里Ⅳ式・船橋式・五雲森式・浮線網状文(古段階)・磨石状磨石が出土。流路から縄文晩期突帯文土器出土。
22	寺中	守山市矢島町	氾濫平野	2B	弥生前期～中期の土器。
23	経田	守山市今宿町	氾濫平野	2B	映畑式土器を伴う土壌。そのほか石鏃・磨斧・磨石・凹石が出土。
24	古高	守山市古高町	氾濫平野	2B	北白川CⅢ式～中津式の包含層。北白川CⅣ式を伴う土壌。
25	古高城	守山市高城堂	氾濫平野	2B	縄文晩期の土器。
26	二町級	守山市二町町	氾濫平野	2B	縄文後期の土器3基。
27	塚ノ越	守山市古高町	氾濫平野	2B	縄文中期後葉の土壌・サヌカイトのデボ遺構。北白川C式のほか、映畑式・神明式・取汲式など東海系の土器が多量に出土。縄文後期の包含層。
28	下長	守山市古高町	氾濫平野	2B	北白川CⅠ・Ⅱ式の竪穴式建物4棟以上。磨石や石鏃を伴い、いずれも直径4.5m前後、円形で中央やや西に石匠炉を持つ。中期末の土壌2基。縄文後期の竪穴式建物に類する落ち込み。晩期突帯文土器。晩期に属すると思われる大型石棒。
29	横江	守山市横江町	氾濫平野	2B	縄文中期後葉の土器・晩期突帯文土器。
30	上寺	草津市長東町	氾濫平野	2B	縄文中期後半の土器を大量に含む包含層。弥生時代前期末から中期の方形周溝墓27基。
31	欲賀城	守山市欲賀町	氾濫平野	2B	縄文晩期のビット。
32	芦浦	草津市芦浦町	氾濫平野	2B	縄文晩期後半、弥生前期後半、弥生中期の土器が出土する旧河道。
33	檜皮堂	草津市下寺町	氾濫平野	2B	縄文中期後葉至縄Ⅲ式の土器片及び石棒。
34	靈仙寺	栗東町靈仙寺	氾濫平野	2B	船元Ⅱ式～北白川C式期(石鏃58・石錘48・石匙29・石斧10・磨石44・石皿3・独鈷石)。縄文晩期の土器。流路より弥生前期古段階～新段階の土器(朱塗りの遠賀川式土器含む)・鏃・鉄・杵・食器類・石包丁、前期末の土城壘・灌漑用水、中期初頭の周溝壘。
35	北太田	草津市長東町	氾濫平野	2B	縄文中期後葉の包含層、突帯文土器、石鏃・磨斧、弥生前期の土器。
36	宝田	草津市新堂町	氾濫平野	2B	石棒(木内石亭「雲根志」)。
37	片岡	草津市片岡町	氾濫平野	2B	沼沢地内から縄文晩期後半の土器がまとめて出土。
38	赤野井湾	守山市赤野井	湖岸近接地	2C	縄文早期後葉～晩期後半、弥生前期新段階の土器(水神平式・元刈谷式・浮線網状文・称名寺式・三十稲葉式・御経塚式・八日市新保式・鬼ヶ岡系等含む)。各種石器・土器片鏃。有孔球状土製品・石剣・杖状耳飾り。早期後葉の集石炉。
39	小津浜	守山市杉江町	湖岸近接地	2C	若干基の縄文晩期突帯文土器・中部地方の浮線網状文、弥生前期中段階の土器を伴う溝、新段階の多くのビット・土城・炭化米・土器、弥生中期初頭の遺構。
40	山賀	守山市山賀	湖岸近接地	2C	自然流路から縄文晩期突帯文土器、弥生前期古段階・中段階・新段階の土器が多量に出土。

表2-1(1) 湖南地域の概要

No.	遺跡名	所在地	現状の立地類型	地区	概 要
41	扇丸崎	草津市下物町	湖岸近接地	2C	縄文晩期突帯文+弥生前期の肩部に段を有する登+2条の沈線を巡らすかを伴う土層、弥生前期中段階を伴う土層。弥生前期新段階の土器。
42	津田江湖底	草津市下寺町	湖岸近接地	2C	土層内から北白川下層Ⅱ式の深鉢に関東地方の諸磯日式の浅鉢で器をしたセットが出土。前期後葉から竊瓦式の包含層。北陸地方の新保式。縄文後期前葉と晩期の包含層。弥生前期の土層。弥生前期新段階の土器。
43	志那湖底	草津市志那町	湖岸近接地	2C	中津式・四ツ池段階・北白川上層式・堀之内Ⅱ式の包含層。北陸地方新保式、福田K2式・元住吉山式。遊賀里Ⅰ～Ⅲ式の土器50種・東北地方大洞系土器・石剣・石鏃・敲石・チップ・同時期の土器相違2型や多数の土壇墓と思われる土壇群を検出。弥生前期後半の柱穴。
44	七条浦	草津市下笠町	湖岸近接地	2C	縄文晩期突帯文土器群、弥生前期新段階。
45	市三宅塚	野洲町市三宅	氾濫平野	2D	中津式の土層・包含層(敲石・円孔を持つ土製円蓋等含む)、縄文晩期前半・後半の土器、縄文晩期の配石遺構、弥生前期前半・後半の土器ないし土層。
46	小篠原・和田	野洲町小篠原	扇状地	2D	縄文晩期突帯文土器、石斧が出土。
47	五之堂	野洲町富波甲	氾濫平野	2D	縄文晩期突帯文土器20数点が出土。
48	野々宮	野洲町富波殿町	氾濫平野	2D	弥生前期後半の土層。
49	服部	守山市服部町	氾濫平野	2E	長原式・弥生前期中段階の土器を含む包含層。この包含層は馬見塚式・中部地方の浮線網状文土器・北陸系小形精製壺なども含む。石棒(土壇長軸端部に直立する)。弥生前期新段階の遺構群・水田跡。
50	湯ノ部	中主町西河原	氾濫平野	2E	縄文晩期突帯文土器、弥生前期の古段階・中段階の土器。
51	八夫流	中主町八夫	氾濫平野	2E	弥生前期中段階・新段階の土器。
52	八夫	中主町八夫	氾濫平野	2E	弥生前期新段階の土器。
53	比江	中主町比江	氾濫平野	2E	弥生前期新段階の土器。
54	木部川ノ手	中主町木部	氾濫平野	2E	河川跡より弥生前期の加底部出土。
55	西河原森ノ内	中主町西河原	氾濫平野	2E	弥生前期後半の土器。
56	野田沼	中主町安治・須原	湖岸近接地	2F	弥生前期中段階ないし新段階の土器。かつて水門工事に際して遊賀里Ⅲ～Ⅳ式の土器と丸木船が出土した。
57	大池	大津市月輪4	丘陵地	3A	旧石器時代終末期に属すると思われる木葉形尖頭器・ナイフ形石器などが出土。
58	大山	大津市三大寺	丘陵地	3A	旧石器時代に属すると思われる有舌ポイント。
59	狸山	草津市野路町	丘陵地	3A	サヌカイトの剥片。
60	横土井	草津市野路町	丘陵地	3A	時期不詳の柱穴状ピットを有する落とし穴状遺構3基を検出。
61	湧瀨谷	草津市野路町	丘陵地	3A	サヌカイトの剥片。
62	野路小野山	草津市野路町	丘陵地	3A	サヌカイトの剥片。
63	野路岡田	草津市野路町	丘陵地	3A	縄文中期末～後期初頭の貯蔵穴状遺構2基を検出。石鏃・チップ・炭化物が出土。
64	矢橋湖底	草津市矢橋町	湖岸近接地	3B	茅山下層・上ノ山式・層畑式・入海式・木島式、早期末～前期初頭(土器片を含む)、羽島下層Ⅱ式・北白川下層Ⅰa～Ⅱb、Ⅱc・Ⅲ式・大蔵山式、船元Ⅱ～Ⅲ木Ⅱ式、後期前葉、遊賀里Ⅰ～Ⅲ式、突帯文土器、石鏃。
65	北笠	草津市御倉町	湖岸近接地	3B	入海Ⅰ・Ⅱ式・石山式・天神山式・早期末～前期初頭、羽島下層Ⅱ式、北白川下層Ⅱc式、後期前葉、北白川上層式、元住吉山Ⅰ式、宮滝式、遊賀里Ⅲa式・北陸中層式、突帯文土器、石鏃・石鏃・石鏃・石皿・小型磨斧・石刀・石棒・挟状耳飾り2点(玉髄1・滑石1)。
66	御倉	草津市御倉町	湖岸近接地	3B	縄文前期後葉北白川下層Ⅱb式、後期後葉宮滝式、縄文晩期突帯文土器、弥生前期新段階の土器。
67	北山田湖底	草津市北山田町	湖岸近接地	3B	羽島下層Ⅰ式を利用した土器片鏃。
68	粟津湖底・大江湖底	大津市晴風1地先	湖岸近接地	4	縄文早期前葉～後期前葉及び晩期後半の土器(関東系の諸磯式、北陸系の晴ヶ峰式・踏場式・新保式、東海系の北覆C1式・山田平式含む)。各種の石器や骨角器、赤漆塗耳栓・同壺蓋、イタボカギ製貝輪・琥珀片、土偶(北陸系3・東海1・然元系1)。中期前葉のトチノキ利用。
69	唐橋	大津市瀬田2	湖岸近接地	4	縄文早期に遡ると考えられる石鏃。早期大川式・神宮寺式・高山寺式・穂谷式・鶴ヶ島台式、東海系系痕文土器、後期後葉宮滝式、晩期後半長原式。
70	笠谷	大津市石山寺1	湖岸近接地	4	国府型ナイフ形石器、縄文早期神宮寺式・葛籠尾Ⅰ式・穂谷式・茅山式・石山式、木島式併行土器、清水ノ上式・オセンベイ土器、北白川下層Ⅰa・Ⅱ・Ⅲ式、中期中葉、後期前葉、晩期後半の土器。有溝石器・石鏃・石鏃・サイドスクレイパー、挟状耳飾りに類する有孔石器。
71	石山	大津市石山寺3	湖岸近接地	4	貝塚。石組炉・埋葬人骨5体(1体は貝塚下土層)。シカ・イノシシ・クマ・骨鏃や鹿角片・土器片垂、各種石器。剥片石器はサヌカイトが主だがチャート・水晶もある。ヤカドツノガイ・ペンケイガイなどを用いた装飾品・骨角製垂飾品。高山寺式・穂谷式のほか早期後葉の土器。
72	沢谷	松原町笠岡	山地(益地)	5A	サヌカイト製石鏃。
73	桐生辻	大津市上桐生	山地	5A	縄文早期後葉関東系系痕文土器が出土。
74	田上山	大津市上田上中野町	丘陵地	5B	旧石器時代に属すると思われるサヌカイト製ナイフ形石器・有舌ポイント。
75	上田上牧	大津市上田上牧	谷底平野	5B	縄文早期末の竪穴式建物・土器・石鏃。
76	森添	大津市上田上堂町	谷底平野	5B	縄文晩期後半突帯文土器。
77	里西	大津市里1	谷底平野	5B	縄文晩期の土器。

表2-(2) 湖南地域の概要

湖南地域における旧石器～縄文草創期の活動痕跡は、表採といった断片的な出土状態でしか確認されていない。しかし、それでもその痕跡が確認できるエリアには2つの傾向がある。一つは湖岸近接地であり、今一つは丘陵地および山地である。既に言われているように、近江の黎明期にはこの2つのエリアを中心に活動していたと考えられる。以下では、そのような事実を踏まえながら、活動痕跡の蓄積が確認されるようになる縄文早期以降の事象の変化を追ってみたい。

第1段階（縄文早期前葉～中葉） 蓄積的な活動痕跡が顕在化する段階。現状では、湖岸近接地の4地区で痕跡が集中的に検出されている。遺構としては、廃棄遺構としての粟津湖底遺跡のクリ塚があるが、居住施設や設備への投資（例えば竪穴式建物の建設や明確な埋葬行為など）は確認されていない。また、祭祀装置や稀少品なども明確ではない。

第2段階（縄文早期後葉～中期前葉） 蓄積的な活動痕跡が複数地区で確認されるようになる段階。2C地区・3B地区の出現にみるように、4地区以外の湖岸近接地においても活動痕跡が認められるようになる。また、それまでの適応地（湖岸近接地）に加え、2A地区・5A地区・5B地区で活動痕跡が出現する。これらは扇状地扇頂部や谷底平野の最奥部などであり、いずれも近江外部に至るルートが結節する地点という共通性をもつ。これ以降、居住施設や埋葬施設が認められるようになり、また祭祀装置・稀少品・土器の搬入などが各地区で確認されるようになる。

第3段階（縄文中期中葉～晩期前半） それまでの適応地（湖岸近接地・扇状地）に加えて氾濫平野部（2B地区）への適応・拡散が顕著になる段階。2A地区・2B地区・2C地区・2D地区・3A地区・3B地区・4地区で活動痕跡が確認される。

晩期前半の一時期に3B地区で搬入土器が若干みられるものの、それを除けば、2A地区・2B地区・2C地区といった旧野洲川流域に居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器などが偏在するようになる。特殊性を有するアイテム・事象を「有し得る地区」と、「有しにくい地区」といった二項構造が出現する。

第4段階（縄文晩期後半・弥生前期前半） 第3段階までの各時期区分の活動痕跡数は5～14で、その平均は約9である。それに対し、晩期後半は33である。このように急激な活動痕跡数の増加がみられる縄文晩期後半を第4段階とする。ほとんどの地区で活動痕跡が確認されるものの、居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器などは旧野洲川下流域の氾濫平野・湖岸近接地（2B地区・2C地区）に限定的に集中分布する。前段階からみられる「有し得る地区」と「有しにくい地区」といった二項構造がますます明確になる。

注目されるのは弥生前期前半の土器の存在形態である。この土器は、祭祀装置や搬入品などが集中する「有し得る地区」とその近辺（2B地区・2C地区・2D地区・2E地区）でしか検出されていない。弥生土器は満遍なく受容されたのではないのである。湖東地域と同様な傾向（瀬口眞司 1997）として留意すべきであろう。

第5段階（弥生前期後半） 氾濫平野及び湖岸近接地以外における活動痕跡がほとんど確認されなくなる弥生前期後半を第5段階とする。活動痕跡が野洲川下流域に集約していく中、規模の大きい設備投資（水田や灌漑用水の造営）、個人に対する労働投下（墳丘墓の造営）もその野洲川下流域で出現する。祭祀装置や搬入土器の存在もこの2B地区・2C地区でのみ限定的に存在する。

4. 湖南地域における展開過程（予察）

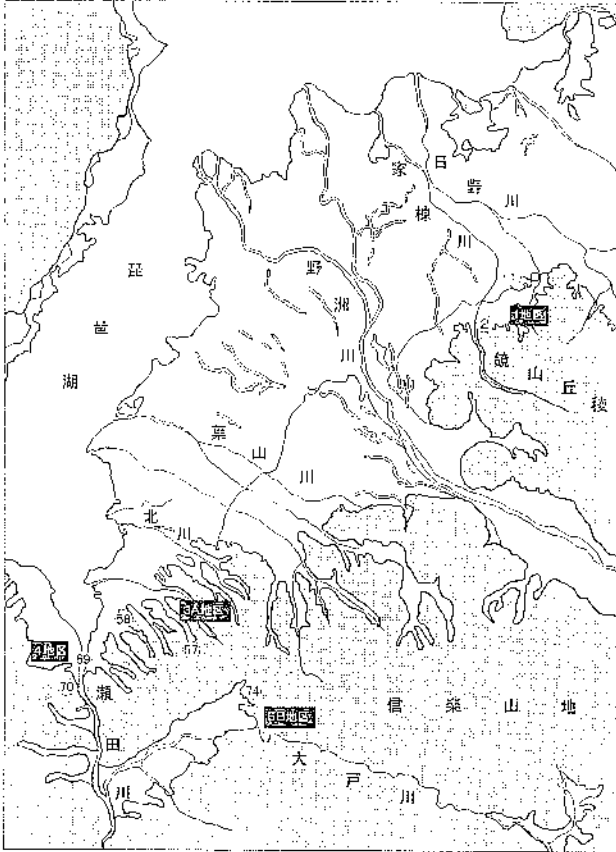
以上、湖南地域における事象の整理を行った。これを共同研究の成果の一つとして提示したい。事実関係において訂正・加筆する必要があるればご教示願う。

ただ冒頭にも述べたように、現状を認識し、そこから生じる仮説や問題点を抽出しなければ、折角の俯瞰作業の意味はなく、また将来もない。そこで、前章までに進めてきた大雑把なアプローチをもとに、湖南地域における展開過程に関する現状での認識（以下ゴシック体）を記し、認識を深める上で必要な仮説と課題（以下明朝体）を提示する。

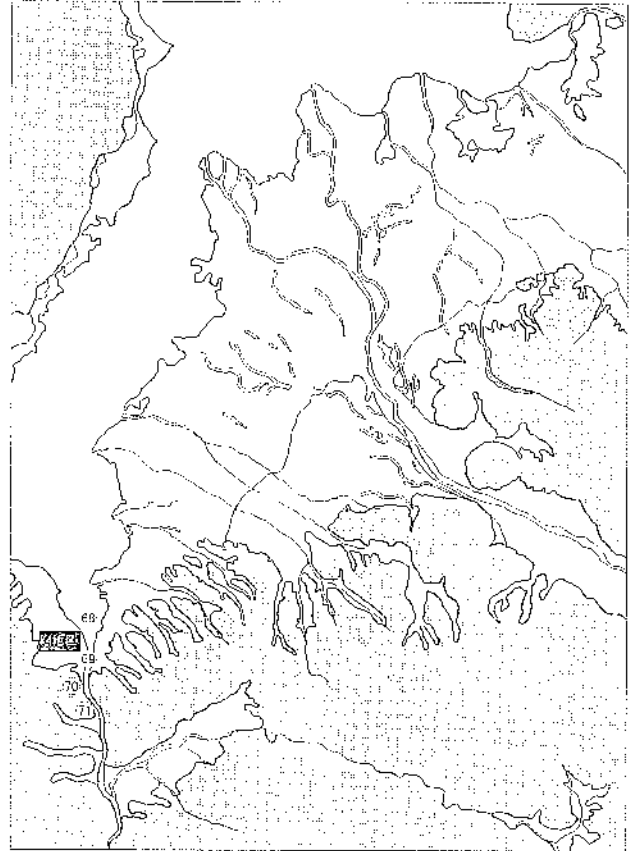
A. 展開過程に関する認識と仮説

【黎明期】 湖南地域における黎明期には、

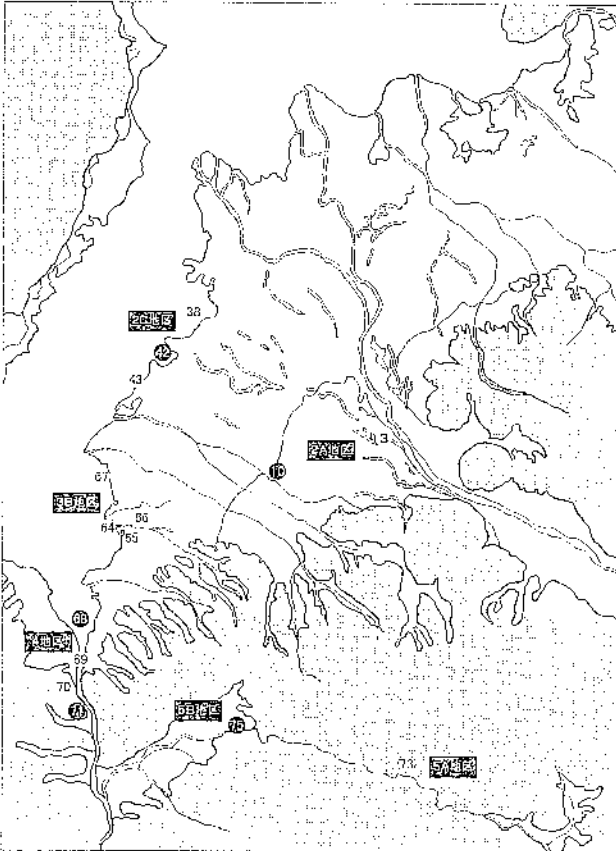
黎明期



第1段階 (縄文早期前葉～早期中葉)



第2段階 (縄文早期後葉～中期前葉)



第3段階 (縄文中期中葉～晩期前半)

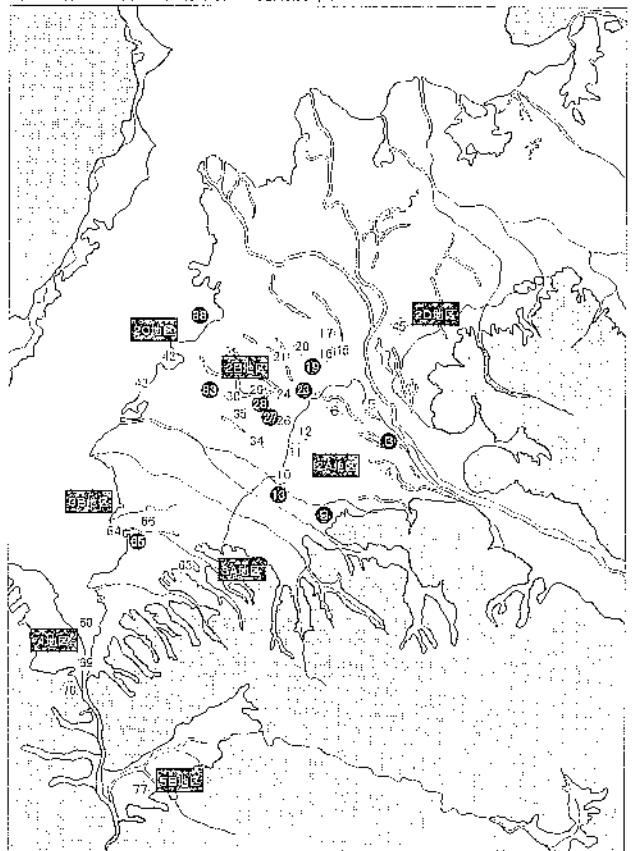
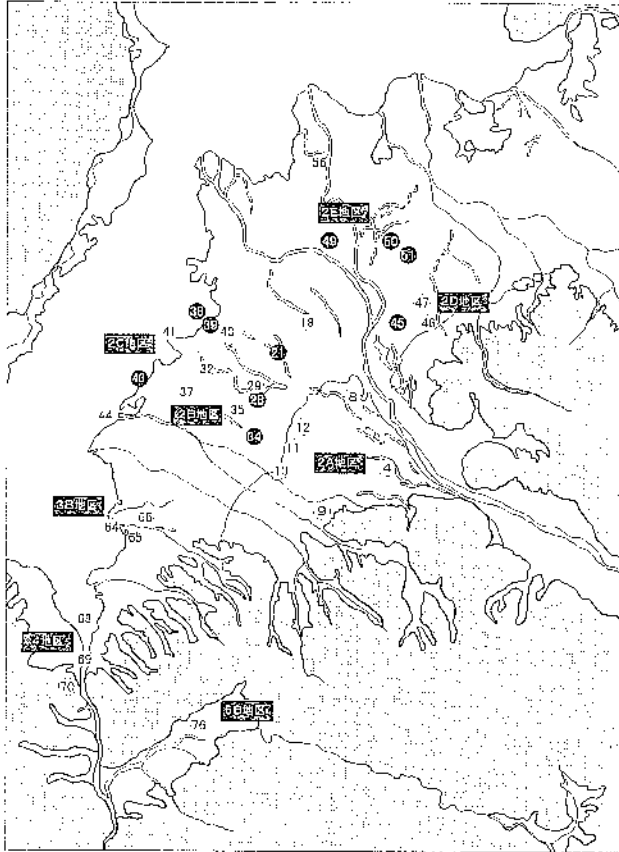


図2：各段階ごとの分布

(黒丸白ヌキ数字は、居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器や、大規模な設備投資・個人に対する労働投下が存在する地点を示す。)

第4段階（縄文晩期後半・弥生前期前半）



第5段階（弥生前期後半）

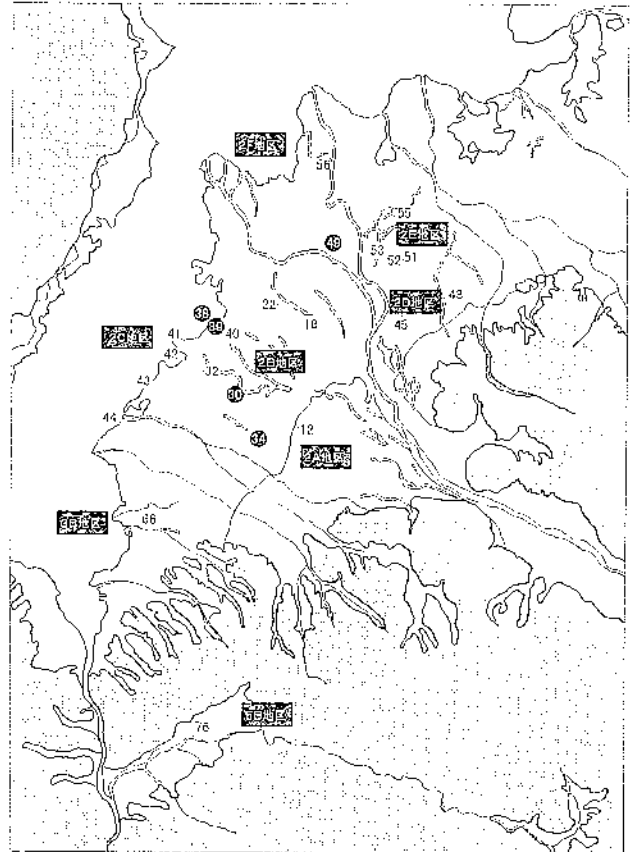


図3：各段階ごとの分布

（黒丸白ヌキ数字は、居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器や、大規模な設備投資・個人に対する労働投下が存在する地点を示す。）

山地ないし丘陵地、および湖岸近接地一帯で活動していた。

【第1段階】 縄文早期前半、琵琶湖に依存した蓄積的な活動を湖岸近接地で開始する。

仮説1：これは低湿地のもつ高い一次生産量（表4）に誘因された事象である。居住施設や設備への投資、祭祀装置や稀少品なども明確ではない。以上の2点から、当段階は「過少生産傾向」の生活戦略にあった可能性が高い。

【第2段階】 縄文早期後葉に至り、湖岸近接地において適応地を増加させ、また湖岸近接地以外の地区でも活動を開始する。明確な居住施設や埋葬施設を設営し始め、祭祀装置・稀少品・搬入土器を伴うに至る。

仮説2：湖岸近接地における活動機会の増加は、前段階からの延長線上にある方向性だと考えられる。しかし、その一方で、稀少品や祭祀装置、設備に対する労働投下量の増大といった「過少生産傾向」に

ない傾向が生じていることから、前段階とは異なる生活戦略も出現した可能性がある。

仮説3：そういった意味で、湖岸近接地以外の地区で新たな適応が進むことは重要である。新たな地区は、平野の最奥部（扇状地扇頂部）や谷底平野最奥部であり、「近江外部へのルート」が結節する要衝だということに注目すべきだろう。湖岸近接地以外への展開は、「外部との干渉」において生じる経済的な利便性、もしくは「外部との干渉」の必要性に誘引された事象だったといえる。可能性として、一次生産量より「外部との干渉」を重視する戦略が付加されたことをこの事象は示している。仮説2との関連でも注目すべきである。

【第3段階】 縄文中期中葉に至り、氾濫平野でも活動し始める。ほとんどの地区で活動する傾向が生じる。居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器などを「有し得る地区」と、「有しにくい地区」といった二項構造が出現する。

表4 デビッド・クラークによる各生態系の一次純生産量と食用生産物の比率 (D. クラーク 1976)

	一次純生産量 (gm ² year ⁻¹)	一次純生産量における食用生産物の比率
低湿地・三角州・河口・潟	800~4,000以上	高い
海岸部・沖積平野・富栄養下の湖・河川流域	500~2,000	高い
浅海部・大陸棚・森林斜面・貧栄養下の湖・草原	200~1,500	並

仮説4：二項構造のうち、「有し得る地区」は野洲川流域（扇状地・氾濫平野・湖岸近接地）にはほぼ限られる。この野洲川沿いのルートは、近江から東日本に通じるルートの中でも、特に勾配が緩やかなので、交通・物流にとっては比較的適するといった性格を潜在的に有している。かつて東海道が通り、現在は国道1号線や鉄道（JR草津線）が置かれ、東日本と西日本を結ぶ大動脈となっているのがその証左である。勾配の相対的な緩やかさ自体は縄文期も変わらず、故に交通・物流上の優位性も存在していたと考える。「外部との干渉」を重視する志向性が前段階において生じている可能性があるだけに、野洲川流域が「有し得る地区」となっているのは、野洲川の交通・物流上の優位性に起因していたと考えて良いだろう。

仮説5：なお、この二項構造の性格としては次の2つが想定できる。第1の想定は、これらの「有し得る地区」が当該地域における「流通・集約のセンター」として存在し、それに派生し付随する居住地として他の地区が存在するといった構造である。

経済人類学的に捉えるならば、これは即ち再分配原理に基づく構造¹³⁾というべきであり、従って、従来想定してきたような互酬性¹⁴⁾のみに基づく「原始社会 (Primitive Society)」とは異なる社会形態の存在を少なくともここでいう第3段階・第4段階において一度考えてみる必要がある。

他地域の土器や稀少性を有する物資、あるいは情報などの搬入がどのようなあり方なのか、それらが「流通・集約のセンター」から分配されていたならば、その実態はいかなるものなのかといった点が問題になろう。

仮説6：一方、「有し得る地区」と「有しにくい地区」といった二項的なあり方は、回帰性を有する遊動居住形態に起因しても起こり得る。つまり、第2の想定は、回帰の帰結点 (=ベース的な居住地)

としての「有し得る地区」と、季節的に移動した先のキャンプ地的な居住地としての「有しにくい地区」といった構造である。

「有し得る地区」には特殊なるもののほかに、遺構（例えば住居址）の重複もみられる。それは「有し得る地区」が本拠地だからであり、それ以外の地区においてエネルギー投下とその重複、集約の痕跡が顕在しない理由はそこがキャンプ地だからとも考えられるのである。回帰性遊動居住形態の存在の有無は、単に居住形態の問題に留まらず、それが否定されるならば再分配原理に基づく構造も想定する必要が生じ、ひいては社会形態の評価にも大きく関わる重要な問題なのである。確かに、定住化は縄文時代の早い段階に起こっているのかも知れない。しかし、それが縄文社会の全時空を通じてベストな居住形態だったとは限らない。上述のように重要な問題に関わる以上、「定住革命」のパラダイムからニュートラルな立場に一度立ち戻り、各地の事象に基づいて検討していくことが不可欠である。

【第4段階】 縄文晩期後半、前段階と同様な地区で活動する一方、急激に活動痕跡を増加させる。居住施設・祭祀装置・稀少品・搬入土器などの集中分布傾向を前段階より更に強め、野洲川流域のなかでも特に氾濫平野・湖岸近接地に偏在させていく。二項構造はますます明確になる。弥生土器も「有し得る地区」がまず受容する。

【第5段階】 弥生前期後半、祭祀装置や搬入土器の集中分布傾向をますます強めるなか、活動地区も限定化させていく。扇状地ではほとんど活動しなくなり、その活動を野洲川下流域の氾濫平野・湖岸近接地に集約させていくのである。そんな中、労働力を集約させる必要のある大規模な設備投資（水田や灌漑用水の造営）、個人に対する労働投下（墳丘墓の造営）がその野洲川下流域で出現する。

仮説7：第4段階以降、野洲川下流域に諸活動が

集約し、突出性を有する傾向が生じる。それを支えたのは何か。その一つは、やはり第3段階以降確認し得る「交通・物流上の優位性」である。

仮説8：しかし、それだけでは第5段階において扇状地での活動がほとんど欠落し、氾濫平野や湖岸近接地に集中する背景が説明できない。扇状地を避け、下流域を志向する背景には何があるのか。——扇状地と氾濫平野・湖岸近接地の相違点に注目すべきであろう。その最も大きな相違は土壤にある。前者が相対的に礫を含む相対的に透水性の高い土壤であるのに対し、後者は低地特有の泥質の土壤である。泥質土壤を重視する傾向が第5段階に強まったために、野洲川下流域への活動の集約が更に促されたと考えたい。明確な水田遺構の検出(49)および研究史的なコンテキストから言えば、第5段階において泥質土壤での水田農耕を志向したが故に、下流域に活動痕跡が集中したと考えるべきなのだろう。

仮説9：水田農耕を志向した結果、土地の開発や生産物の備蓄、およびそれらを維持・管理する必要性が生じ、それ故に土地に密着する必要性も生じた。その結果、回帰性の遊動居住形態から脱却し、本格的な定住形態を採用した。(この場合、第4段階までは回帰性の遊動居住形態を採用していたという仮説に拠って立っている。)

仮説10：渡辺仁氏(渡辺仁 1990)や、A. テスタール氏(A. テスタール 1995)は、定住化ないし備蓄が顕在化することにより社会の不平等化・階層化が始まるといったモデルを提示している。もし、彼らのモデルを認め、仮説6・8・9が正しければ、近江の湖南地域では、遅くとも第5段階には不平等社会・階層制が顕在化し始めたと考えて良いだろう。個人への労働投下(方形周溝墓の造営)がこの段階にみられ始めることはその証左と考える。

B. ここに生じる問題点の整理

課題1 仮説1・2の検証と反証のために、生業形態に焦点を当てた検討を加えていきたい。特に、「獲得エネルギー源、獲得技術、アイテムの質・量などに段階間の差異はみられるのか?あるならばどの段階に、どのように現れるのか?」といった点を問題にしたい。

課題2 仮説3～5・7については、資料の蓄積

を通して検証・反証していく必要性があろう。また、より具体性を持たせるために、搬入材(サヌカイトなど)や土器製作などに関する情報の分配・流通過程についても目を移す必要がある。また、一方向的な流入の結果なのか、双方向的な交換の結果なのか、後者ならば、どの段階から搬出しているのかといった点を問題にしながら、三重県など隣接地域を俯瞰する必要性もある。

課題3 仮説6・9・10にみるように居住形態の把握は、必要不可欠な作業である。季節性の算定に有効な遺物や遺存体(貝類の成長曲線や獣骨歯牙の萌出状況など)の調査・研究に期待したい。

課題4 仮説8についてはプラントオーバー分析などを盛んに行い、議論の基盤を作ることが重要である。水田遺構の検出(49)からみて、遅くとも第5段階には水田農耕の存在は推察されるが、それがどの段階までさかのぼれるか。社会の復元を求めるならば、真剣に検討する必要がある。

そのほか 冒頭でも述べたとおり、古地形・古環境については可能な範囲での類推にしか基づいていない。本論の基盤のひとつが形成されていないのである。地形変遷プロセスと古環境の復元を可能な範囲で早急に着手したい。また、今回は仮説6に重点を置いた仮説9・10を提示した。仮説5に拠って立つ仮説も同様に必要である。紙数の都合で割愛するので、今後整理すべき課題としておく。

5. 結語

以上、湖南地域における地理的条件や事象の整理、それに基づく仮説と課題の提示を行った。今後は上記課題の検討、及び各地域の俯瞰作業、地域間の比較作業に努めていきたい。

ところで、埋蔵文化財の置かれる立場も日に日に厳しくなっている。その様相は加速度を増すに違いない。なぜ埋蔵文化財行政が必要なのか、なぜ考古学が必要なのか。なぜ発掘し、遺物に触れるのか。9回二死のピンチ、逆点せねば明日はない⁽⁷⁾。得点圏には先学の業績という走者がいる。狙い球は決めた。バッターボックスに私は向かう。ゲームはこれからだ。

謝辞 着想にあたっては辻川哲朗氏との対話が
大いに役立った。特に結節点を重視する視点や回帰
性遊動居住形態の想定は氏のアドバイスによるこ
ろが大きい。

資料の収集にあたっては特に辻広志氏・近藤広氏
・濱修氏・伊庭功氏・田井中洋介氏・中村健二氏・
岩橋隆浩氏・松室孝樹氏・鈴木康二氏にご教示を得、
本稿をまとめるにあたっては近江貝塚研究会に討議
という協力を得た。また、図表の作成にあたっては
大崎康文氏の多大な協力を得た。感謝いたします。

なお、闘病していた親友が本稿の準備中に逝って
しまった。苦悩の末に考古学を「手段」と捉え直し、
新たな展望を模索していた矢先だったと夫人は言う。
彼の遺志を私なりに次ぎたい。—————
本稿を故藤城泰氏の霊前に捧げる。

註

- (1) 21歳の時、奈良市平城宮大極殿から福岡県太宰府市大宰府政庁正殿まで徒歩で移動した。約20kgの荷物を背負い、一日平均約40kmを歩き、3週間でも辿り着いた。水とランドマークの必要性以外で痛感したのは、携行品は必要最低限に省くべきこと、回り道でも平坦な道のほうが山越えより楽なこと、どうしても山越えするときはなるべく勾配の緩やかな道を選ぶべきことである。
- (2) それぞれの社会には環境が持つ産出高の極大点や生産の技術的極限がある。その限界点より低く、その経済能力を留める傾向を「過少生産傾向」という(M. サーリンズ 1984)。豊かさへの道は2つある。一方は多く生産すること、他方は少なく欲求することである。前者は拡大再生産傾向、後者がここでいう過少生産傾向だといえる。備蓄や余剰の存在を知っているにも関わらず、ヤーガン族などはそれをしない。一年中何らかの形で満たされるが故にそれらを必要としないのだ。環境的・技術的に欲求充足しやすいが故に過少生産傾向にあるのである。一次生産量の高い、つまり環境的に豊かな湖岸近接地を志向する当段階は過少生産傾向にある可能性が高い。一方、どんなに豊かな環境でも獲得圧や季節的な減少によってやがて収穫過減に切迫する。それを解決するために遊動居住形態を採らねばならず、財は重荷となり、それ故にアイテムの所有・占有概念をもたないに至る。明確な施設への投資をみないことから当段階は過少生産傾向にあると考えられる。なお、近江全体で観た場合、湖岸近接地と山中といった全く異なる2つの環境に当段階の活動痕跡は分布している。つまり可能性として、この両地点を遊動しながらおそらく季節的な生産量の減少に伴う収穫過減を回避していたと想定し得る。湖岸近接地では季節性を表す遺存体が豊富に残りやすい。社会の展開過程を復元する上で、それらを用いた季節性の把握が今後不可欠である。
- (3) 共同体成員が共通に崇拝する超自然的存在(または神)と特権的に交流できる立場(王ないし首長)に、共同体成員からの財・労働力提供が集約し、そこから再び共同体成員に対して財・サービスが払い戻されるといったシステム(栗本慎一郎 1995)をここではその第一義とする。現代考古学では交易形態からアプローチしている。交易形態にはa) 玉突き交易とb) 交易センターを介する交易といった2つの類型が存在する。a) の場合は産地からの距離に伴い交易品の量が過減し、b) の場合は産出地からの距離とは無関係に交易品の多寡が現れるといった事象上の特性がある。b) の存在については、縄文時代の石材流通システムにおいて小杉康氏が指摘している(小杉康 「黒曜石産出地における採掘活動の復元—長野県鷹山遺跡群の調査」『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集』1994)。これらのこととRenfrewらの成果(Renfrew, Colin and Paul Bahn :Archaeology theories, Methodes and Practice, Thames and Hudson, London, 1991)を踏まえた泉拓良氏は、b) のケースにおいて地域内での再分配や市場が存在する可能性を想定し、縄文社会にも集落間の階層差や首長制の存在を考える必要性を述べた(泉拓良 1996)。そこで、筆者も交易センター間の直接交易、交易センターへの物資の集約、それに基づく周辺集落への分配といったシステムの存在をイメージした上で、縄文社会における再分配原理の存在の是非を問うていきたい。
- (4) 血族・友人・地縁・婚姻を通じて行われる相互扶助的な行為である互酬性に基づき、再分配原理に基づく社会にみられるような明確な王や首長といったものを持たない社会をここでは指す(栗本慎一郎 1995)。
- (5) 近江においては、近年、貝殻成長曲線を用いた稲葉正子氏(稲葉正子 1997)やイノシシ歯牙の萌出状況を用いた内山純蔵氏(内山純蔵ほか 1998)が優れた成果を上げている。特に内山氏が重視しているように、単に生業カレンダーの復元といった問題意識に留まることなく、居住形態や生活戦略の把握へと昇華を試みるべきで、ますます展開すべき研究方向である。両氏を初めとする各地の成果の積み上げを心から期待したい。
- (6) いまや自然科学的見地からも稲作農耕の痕跡は縄文晩期より以前にまでさかのぼれるとする意見もある(高橋護 1994)。
- (7) 「文化財保護法があるから」、あるいは「考古学という学問があるから」という動機だけで何時までも通用するとは思えない。存在理由は何か?なぜ必要なのか?発想の逆

転も必要だ。

《引用文献一覧》

- ・ A. テスタール 1995 『新不平等起源論 狩獵=採集民の民族学』 法政大学出版局
- ・ D. クラーク 1976 Mesolithic Europe : the economic basis
- ・ 土偶とその情報研究会 1997 『土偶シンポジウム6 奈良大会 西日本をとりまく土偶』
- ・ 平凡社地方資料センター編 1991 『日本歴史地名大系 第25巻 滋賀県の地名』 平凡社
- ・ 稲葉正子 1997 「第9章 動物遺体 第1節 貝類 4. セタシジミの貝殻成長線分析」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書1 粟津湖底遺跡第3貝塚(粟津湖底遺跡I)』
- ・ 泉拓良 1996 「第四章 縄文土器・文化の多様性」『歴史発掘② 縄文土器出現』 講談社
- ・ 栗本慎一郎 1995 『経済人類学を学ぶ』 有斐閣選書
- ・ 小島孝修 1997 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討2. 湖東南部地域」『紀要 第11号』 滋賀県文化財保護協会
- ・ M. サーリンズ 1984 『石器時代の経済学』 法政大学出版局
- ・ 瀬口真司 1997 「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き 地域の検討1. 湖東北部地域」『紀要 第11号』 滋賀県文化財保護協会
- ・ 滋賀県百科事典刊行会編 1994 『滋賀県百科事典』 大和書房
- ・ 高橋 護 1994 「縄文農耕と稲作」『市民の古代 第16集』 ビレッジプレス
- ・ 内山純蔵ほか 1998 「第V章 自然科学分析 第8節 動物遺存体II (浚渫A調査区)」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2 赤野井湾遺跡』
- ・ 渡辺 仁 1990 『縄文式階層化社会』 六興出版

そのほか、以下に記す文献や調査担当者の教示によって各遺跡の内容を整理することができた。なお、ここに付す番号は、文・図・表において各遺跡に付した番号と同一である。また、滋賀県教育委員会は「県教委」、滋賀県文化財保護協会は「滋賀県協」と略し、各市町村教育委員会については市町村名に「教委」を付した。また『滋賀県文化財だより』は『だより』と略した。

- 1・森 隆 「220. 野洲町出土の石器資料」『だよりNo198』1994
- 2・森 隆 「220. 野洲町出土の石器資料」『だよりNo198』1994

- 3・ 滋賀県文化財発掘調査 1994年度年報』1995
- ・ 県教委編 「平成7年度滋賀県文化財調査年報」1997
- 4・ 滋賀県文化財発掘調査 1990年度年報』1991
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1993年度年報』1994
- ・ 栗東町史編纂委員会編 『栗東の歴史第4巻』1994
- ・ 県教委・滋賀県協編 『県道高野・守山線特殊改良工事に伴う高野・辻遺跡発掘調査報告書2』1990
- ・ 県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1988
- 5・ 県教委編 『昭和63年度滋賀県文化財調査年報』1988
- 6・ 守山市教委編 『守山市文化財調査報告書第13冊』1984
- ・ 守山市教委編 『守山市文化財調査報告書第21冊』1986
- 7・ 県教委編 『平成6年度滋賀県文化財調査年報』1986
- 8・ 守山市教委編 『守山市文化財調査報告書第13冊』1984
- ・ 守山市教委編 『守山市文化財調査報告書第19冊』1985
- 9・ 「173. 平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo147』1990
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1990年度年報』1991
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1990年度年報II』1991
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1991年度年報』1992
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1992年度年報』1993
- ・ 栗東町史編纂委員会編 『栗東町の歴史』第4巻 1994
- 10・ 滋賀県文化財発掘調査 1991年度年報』1992
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1991年度年報II』1993
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1992年度年報』1993
- ・ 近藤 広 「194. 平成3年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo168』1992
- 11・ 栗東町教委『埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報』1989
- ・ 滋賀県文化財発掘調査 1990年度年報』1992
- ・ 県教委編 『平成3年度滋賀県文化財調査年報』1993
- 12・ 守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第44冊』1992
- ・ 守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第48冊』1993
- ・ 近藤 広 「231. 平成6年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo209』1995
- 14・ 県教委編 『平成3年度滋賀県文化財調査年報』1993

- ・県教委編 『平成6年度滋賀県文化財調査年報』1996
- 15・守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第13冊』1993
- ・山崎秀二 「17. 守山市播磨田東遺跡出土の石器」『だよりNo7』1977
- ・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- 16・県教委編 『平成5年度滋賀県文化財調査年報』1995
- 17・県教委編 『平成6年度滋賀県文化財調査年報』1996
- ・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 18・県教委編 『平成6年度滋賀県文化財調査年報』1996
- ・県教委・(財)県協会編 『今市遺跡－県道矢橋・小島線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』1996
- 19・県教委編 『昭和62年度滋賀県文化財調査年報』1989
- ・県教委編 『平成4年度滋賀県文化財調査年報』1994
- ・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 20・守山市教委編 『守山市文化財調査報告書第13冊』1984
- ・県教委編 『昭和54・55・56年度滋賀県文化財調査年報』1983
- 21・県教委・(財)県協会編 『石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1988
- ・県教委・(財)県協会編 『石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1988
- 22・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- ・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991
- 23・守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第36冊』1990
- 24・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- ・守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第52冊』1994
- 25・県教委編 『平成5年度滋賀県文化財調査年報』1995
- 26・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991
- 27・県教委編 『平成7年度滋賀県文化財調査年報』1997
- ・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 28・守山市教委編 『守山市文化財発掘調査報告書第19冊』1985
- ・「217. 平成5年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo194』1994
- ・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991
- ・県教委編 『平成4年度滋賀県文化財調査年報』1994
- ・県教委編 『平成7年度滋賀県文化財調査年報』1997
- ・野洲町立歴史民俗資料館編 『滋賀の石器時代』1995
- 29・滋賀県立近江風土記の丘資料館編 『近江の縄文時代』1984
- 30・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- 31・県教委編 『平成4年度滋賀県文化財調査年報』1994
- 32・県教委編 『平成4年度滋賀県文化財調査年報』1994
- 33・草津市教委編 『草津市文化財調査報告書8』1984
- 34・栗東町教委編 『栗東町文化財調査報告書第2冊』1989
- ・栗東町史編纂委員会編 『栗東町の歴史第1巻』1988
- ・栗東町史編纂委員会編 『栗東町の歴史第4巻』1994
- ・県教委・(財)県協会編 『県道志那中線道路改良工事に伴う霊仙寺遺跡発掘調査報告書』1990
- ・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 35・草津市教委編 『草津市文化財調査報告書8』1984
- ・草津市教委編 『草津市文化財調査報告書10』1986
- 36・草津市教委編 『草津市文化財調査報告書8』1984
- 37・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- 38・県教委・(財)県協会編 『琵琶湖開発工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書2』1990
- 39・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- ・県教委編 『昭和62年度滋賀県文化財調査年報』1989
- ・県教委・(財)県協会編 『琵琶湖開発工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書2』1998
- 40・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- ・県教委・(財)県協会編 『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅰ』1986
- 41・県教委・(財)県協会編 『文化財調査出土遺物仮収納業務昭和62年度発掘調査概要』1988
- ・県教委・(財)県協会編 『文化財調査出土遺物仮収納業務平成元年度発掘調査概要』1990
- ・「173. 平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介その1」『だよりNo147』1990
- ・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- ・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991
- 42・「146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その5」『だよりNo118』1987
- ・井上洋介 「津田江湖底遺跡の表採遺物について」『紀要第4号』1990
- ・県教委編 『昭和62年度滋賀県文化財調査年報』1989
- ・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991
- ・県教委編 『平成3年度滋賀県文化財調査年報』1993
- 43・県教委・(財)県協会編 『志那湖底遺跡発掘調査概要－志那南その2Ⅰ工区』1987
- ・県教委・(財)県協会編 『湖岸堤管理用道路志那北その2Ⅰ工区建設に伴う志那湖岸遺跡試掘調査報告書』1986
- ・「141. 昭和60年度滋賀県下における発掘調査の紹介その4」『だよりNo110』1986
- ・「146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介その4」『だよりNo118』1987
- ・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- ・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- ・草津市教委編 『草津市文化財調査報告書8』1984
- 44・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- ・県教委編 『平成元年度滋賀県文化財調査年報』1991

- ・県教委・財協編 『文化財調査出土遺物仮収納業務平成元2年度発掘調査概要』1991
- 45・野洲町教委編 『野洲町文化財資料集1990-4』1990
- ・野洲町教委編 『野洲町文化財資料集1993-3』1993
- ・県教委編 『昭和58年度滋賀県文化財調査年報』1985
- ・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1996
- ・野洲町教委・野洲ロータリークラブ編 『古代と現代の同居』1983
- 46・県教委編 『昭和54・55・56年度滋賀県文化財調査年報』1983
- 47・県教委編 『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』1978
- ・滋賀県立近江風土記の丘資料館編 『近江の縄文時代』1984
- 48・県教委編 『昭和59年度滋賀県文化財調査年報』1986
- ・野洲町教委編 『現地説明会資料野々宮遺跡』1985
- 49・県教委・守山市教委編 『服部遺跡発掘調査概報』1980
- ・辻広志ほか 「45. 守山市服部遺跡の弥生前期水田址」『だよりNo23』1979
- ・滋賀県立近江風土記の丘資料館編 『近江の縄文時代』1984
- ・県教委・財協編 『琵琶湖開発工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書2』1990
- 50・県教委・財協編 『県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡（V）湯ノ部遺跡Ⅳ・西河原宮ノ内遺跡Ⅰ発掘調査報告書』1999
- 51・中主町教委編 『中主町文化財調査報告書第12集』1987
- 52・中主町教委編 『中主町文化財調査報告書第3集』1985
- 53・中主町教委編 『中主町文化財調査報告書第1集』1983
- 54・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 55・中主町教委編 『中主町文化財調査報告書第12集』1987
- 56・中主町教委編 『中主町文化財調査報告書第15集』1988
- 57・県教委・草津市教委・財協編 『国道1号線京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第1冊』1985
- 58・『新修大津市史第9巻』1986
- 59～62・県教委・草津市教委・財協編 『国道1号線京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第1冊』1985
- 63・県教委編 『平成8年度滋賀県文化財調査年報』1998
- 64・県教委・財協編 『湖南中部流域下水道矢橋処理場中間水路浚渫工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書Ⅰ』1988
- ・滋賀総合研究所編 『琵琶湖と埋蔵文化財』1984
- 65・県教委・財協編 『文化財調査出土遺物仮収納業務昭和63年度発掘調査概要』1989
- ・井上洋介 「182. 草津市北萱遺跡出土の縄文土器」『だよりNa155』1990
- ・県教委・財協編 『北萱遺跡発掘調査報告書』1994
- 66・県教委・財協編 『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ-12』1990
- ・県教委・財協編 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1986
- 67・滋賀総合研究所編 『琵琶湖と埋蔵文化財』1984
- 68・県教委・財協編 『粟津貝塚湖底遺跡』1984
- ・県教委・財協編 『琵琶湖開発工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書1』1997
- ・県教委・財協編 『県立琵琶湖漕艇場浚渫工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1986
- 69・県教委編 『昭和62年度滋賀県文化財調査年報』1988
- ・大津市歴史博物館 『特別陳列 大津の縄文時代』1995
- 70・「135. 昭和59年度滋賀県下における発掘調査の紹介」『だよりNo102』1985
- ・県教委・財協編 『瀬田川浚渫工事他関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1992
- 71・「120. 昭和58年度滋賀県下における発掘調査の紹介その2」『だよりNo84』1984
- ・西田弘 「文化財教室シリーズ（Ⅱ）石山貝塚」『近江の文化財教室』1977
- 72・信楽町教委編 『信楽町文化財報告書第4集』1990
- 73・県教委・財協編 『大戸川ダム建設に伴う発掘調査報告書刺生辻遺跡』1998
- 74・『新修大津市史第9巻』1986
- 75・県教委・財協編 『ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅤ-4』1998
- 76・『新修大津市史第9巻』1986
- 77・県教委編 『平成6年度滋賀県文化財調査年報』1996

編集後記

今回は、縄文時代から中世までの論考、および歴史学そのものに関する問いかけを掲載しました。——時は世紀末、新たな一世紀を我々はもうすぐ迎えようとしています。未来と現在を真剣に考え、そのために過去のデータを蓄積していく。それが文化財保護・考古学に携わる我々の責務の一つだと思われます。本号がその一助になるのを願ってやみません。(S)

平成11年3月

紀 要 第 1 2 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大苅町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668